

2025年09月07日（日） 13:20 - 15:00（web発表）

日本心理学会第89回大会

3C-072-PO

同性友人関係における状況に応じた切替尺度 多年齢対応版（SCSM）の開発

大学生から高齢者を対象とした多母集団同時分析

大谷 宗啓^{1,2}・若松 養亮¹

（1. 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科， 2. 滋賀大学）

ohtani_m@outlook.com



要 約

課題

同性友人関係における状況に応じた切替（大谷, 2007, 2019）を測定する多年齢対応版尺度の開発

方法

- ・ 先行研究から収集した項目を基に尺度用項目を作成
- ・ 大学生・30歳代・50歳代・70歳代×男性・女性の8群を回答者とし，多母集団同時分析を実施
- ・ 既存尺度項目との関連によって併存的妥当性を検討

結果

- ・ 幅広い年齢層に適用可能であると共に，評定平均値を使用可能な内的整合性を備えることを確認
- ・ 先行知見を活用可能な併存的妥当性を確認

「状況に応じた切替」 (大谷, 2007, 2019) とは

1990年代後半に登場した「選択化論」が注目した特徴を以下2つの下位概念で整理したもの。

対象切替：状況に応じて関係対象（友人）を切り替えること

項目例「どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う。」

自己切替：状況に応じて自己のあり方を切り替えること

項目例「どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ（性格）が変わる。」

対象切替×自己切替の組み合わせに着目することによって、生涯にわたる心理社会的発達と友人関係の相互関係を説明する可能性をもつ（大谷他, 2024）

本報告の課題：尺度開発（大谷（2007）の尺度の改訂）

背景

- ・大谷（2007）の尺度は高校生・大学生用

➡ 成人に問うには不適當な項目も。

- ・場面限定の強い項目（以下，高文脈項目とする）の混在によると考えられる内的整合性の低さ

大谷（2007）は因子得点による使用を想定
＝標本集団に依存する得点になる

➡ 複数の研究による知見蓄積に不便。

要求仕様

➡ 幅広い年齢層に適用可能であると共に，
評定平均値を使用可能な内的整合性を備えること。

新規尺度用の項目を用意

対象切替項目の収集

- 先行研究（岩田, 1999; 勝家, 2014; Matsushima, 2016 ; 宮崎・田端・池上, 2010; 長沼・落合, 1998; 大谷, 2007, 2013; 小澤, 2016; 菅原, 2011; 辻, 1999, 2004）から36項目を収集。

自己切替項目の収集

- 先行研究（浅野, 1995, 2014; 藤野, 2022; 岩田, 1999, 2000, 2006, 2014; 勝家, 2014; Matsushima, 2016; 大谷, 2007, 2013; 菅原, 2011; 辻, 1999, 2004）から49項目を収集。

➡ 成人以降にも適用可能かつ高文脈項目にあたらない項目を選択ないし改変

➡ **対象切替6項目, 自己切替6項目**を作成。

併存的妥当性検討用の項目を用意

高文脈項目を混ぜないことによって、先述の…

要求仕様 幅広い年齢層に適用可能であると共に、
評定平均値を使用可能な内的整合性を備えること。

…を達成できて使い勝手が向上したとしても、
高文脈項目と測定内容が乖離することは問題。

➡ 併存的妥当性の検討用に、高文脈項目（対象切替3項目、
自己切替3項目）を用意（選択ないし改変）。

なお、高文脈項目＝場面限定の強い項目であるため、
全年齢層の回答者ではなく大学生回答者のみを想定して
項目を選定し、大学生回答者のみに回答を求めた。

調査の概要

調査時期

2024年12月から 2025年1月にweb調査を実施。

調査回答者

インターネット調査会社の登録モニター。

大学生・30歳代・50歳代・70歳代×男性・女性の8群各400名。

➡ 具体的に思い浮かべられる友人を「0名」と答えた者、
同一選択肢の反復回答があった者、および、
超長時間回答・超短時間回答（江利川・山田, 2015）に
あたる者を除外。

分析対象

➡ 最少人数群に揃えて、8群各193名を乱数生成で抽出。

大学生調査は18歳から22歳の4年制大学生を対象とした。

Table 1

回答者数・有効回答者数と抽出後の分析対象者数・平均年齢・就業状態

年齢層	性	回答者数	有効回答者数	分析対象者						
				<i>n</i>	年齢	就業状態(%)				
					<i>M (SD)</i>	有職	家事専業	大学生	無業	他・不明
大学生	男性	400	288	193	20.60 (1.18)	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
	女性	400	293	193	20.67 (1.25)	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
30歳代	男性	400	193	193	35.49 (2.70)	90.7%	1.6%	0.0%	7.3%	0.5%
	女性	400	225	193	35.16 (2.87)	73.6%	18.7%	0.0%	6.2%	1.6%
50歳代	男性	400	216	193	54.78 (2.72)	86.5%	2.1%	0.0%	9.3%	2.1%
	女性	400	264	193	53.80 (2.69)	61.1%	30.1%	0.0%	6.2%	2.6%
70歳代	男性	400	246	193	73.74 (2.63)	29.0%	2.1%	0.0%	66.8%	2.1%
	女性	400	275	193	73.41 (2.51)	14.0%	60.1%	0.0%	22.8%	3.1%
計		3200	2000	1544	45.96 (20.07)	44.4%	14.3%	25.0%	14.8%	1.5%

注) 最少有効回答者数の30歳代男性に揃え各群193名を乱数生成によって抽出した。

令和2年国勢調査と比べて、やや無業者が多め。

調査の内容

新規尺度用の項目

対象切替6項目と，自己切替6項目。

「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）の5件法で回答を求めた。

併存的妥当性検討用の高文脈項目（大学生にのみ実施）

対象切替3項目と，自己切替3項目。

「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）の5件法で回答を求めた。

調査は滋賀大学研究倫理委員会の承認（承認番号: B240009）を得て実施した。

新規尺度の構成

挟み込み法（堀, 2005）により，想定通りの2因子解が適当と判断。

- ➡ 複数負荷を示した2項目を除外。
- ➡ 年齢層×性の8群全てで許容し得る適合度を確認。
- ➡ 多母集団同時分析を実施。

Table 2

新規尺度の多母集団同時分析によるモデル比較

	χ^2	df	χ^2 / df	p 値	CFI	RMS EA	AIC
配置不変モデル	595.86	272	2.19	<.001	.957	.079	931.86
弱測定不変モデル	689.16	342	2.02	<.001	.954	.073	885.16
測定不変モデル	714.65	349	2.05	<.001	.952	.074	896.65
強測定不変モデル	1025.08	403	2.54	<.001	.918	.089	1099.08

- ➡ 測定不変モデルの適合度も良いが，先行研究を基に因子間相関の年齢層差を想定した弱測定不変モデルの採用を検討。

拡大してご覧下さい。



Table 3

新規尺度の各項目の記述統計量と弱測定不変モデルの標準化パス係数

		大学生				30歳代				50歳代				70歳代			
	<i>M (SD)</i>	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性		女性	
		F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2	F1	F2
F1: 対象切替 (4項目, $\alpha=.80$)																	
01. どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う。	3.66 (1.13)	.67	—	.66	—	.63	—	.60	—	.60	—	.63	—	.63	—	.65	—
03. 相談内容によって、どの友人に相談するかを選ぶ。	3.64 (1.11)	.74	—	.69	—	.72	—	.70	—	.71	—	.67	—	.71	—	.71	—
07. 話したい内容によって連絡する(話をする)友人が違う。	3.49 (1.13)	.78	—	.74	—	.81	—	.75	—	.79	—	.76	—	.83	—	.78	—
09. 何をしようとするかによって、それに合った性格や特徴をもつ友人を誘うようにしている。	3.33 (1.12)	.71	—	.66	—	.69	—	.68	—	.75	—	.67	—	.72	—	.72	—
F2: 自己切替 (6項目, $\alpha=.91$)																	
02. どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラが変わる。	2.73 (1.24)	—	.71	—	.71	—	.75	—	.76	—	.77	—	.82	—	.79	—	.77
04. 関わる相手や集団によって、自分のキャラが変わる。	2.77 (1.22)	—	.73	—	.76	—	.77	—	.80	—	.85	—	.83	—	.85	—	.83
06. その場の雰囲気によって自分のキャラが変わる。	2.65 (1.19)	—	.73	—	.76	—	.76	—	.80	—	.82	—	.85	—	.88	—	.85
08. 頼みごとをしたい、相手をなぐさめたいなど、その時の場面によって自分のキャラが変わる。	2.74 (1.17)	—	.70	—	.70	—	.74	—	.72	—	.78	—	.75	—	.76	—	.77
10. その場で求められていそうなキャラに変わる。	2.56 (1.17)	—	.70	—	.70	—	.75	—	.69	—	.80	—	.75	—	.82	—	.79
12. 話す友人によって、相手に対する自分のキャラが変わることがある。	2.64 (1.18)	—	.81	—	.75	—	.81	—	.80	—	.87	—	.85	—	.83	—	.91
因子間相関		.60	***	.53	***	.38	***	.53	***	.32	***	.28	**	.31	***	.24	†
年齢層・性別にみた下位尺度得点の α 係数		.78	.83	.77	.86	.76	.88	.81	.90	.81	.94	.77	.93	.83	.92	.79	.92
(除外項目)																	
05. 機嫌の良い日と悪い日とでは、一緒にいたい友人が違う。	2.65 (1.16)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11. 場合にに応じて、いろいろな友人とつきあうことが多い。	2.79 (1.19)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
注) 各項目の得点可能範囲は1-5。各項目への標準化パス係数は全て0.1%水準で有意であった。																	
† $p<.100$ ** $p<.010$ *** $p<.001$																	

年齢層・性別にみた下位尺度得点の α 係数

想定通り因子間相関には年齢層差 ➡ 弱測定不変モデルを採用。

年齢層・性別の α 係数は.76～.94 (Table 3青枠内)



評定平均値を使用可能な内的整合性を備える

併存的妥当性検討用の，高文脈項目尺度の構成

挟み込み法（堀, 2005）により，想定通りの2因子解が適当と判断。

- ➡ 2群全て（大学生男女）で許容し得る適合度を確認。
- ➡ 多母集団同時分析を実施。

Table 4

高文脈項目尺度の多母集団同時分析によるモデル比較

	χ^2	df	χ^2 / df	p 値	CFI	RMS EA	AIC
配置不変モデル	44.55	16	2.78	<.001	.908	.096	96.55
弱測定不変モデル	50.20	22	2.28	<.001	.909	.081	90.20
測定不変モデル	51.12	23	2.22	<.001	.910	.080	89.12
強測定不変モデル	55.29	29	1.91	.002	.916	.069	81.29

- ➡ 強測定不変モデルを採用。

Table 5
高文脈項目尺度の各項目の記述統計量と強測定不変モデルの標準化パス係数

	<i>M</i> (<i>SD</i>)	大学生			
		男性		女性	
		F1	F2	F1	F2
F1: 対象切替 (3項目, $\alpha=.60$)					
01. 私は、恋愛相談をする友人と、進路の相談をする友人とは違うと思う。	3.23 (1.04)	.55	—	.55	—
03. 私は、一緒に昼食をとる友人と、暇なときに遊ぶ友人とは違う。	2.97 (1.14)	.52	—	.52	—
05. 私は、遊ぶ友人と勉強する友人を区別している。	2.85 (1.13)	.67	—	.67	—
F2: 自己切替 (3項目, $\alpha=.58$)					
02. 私は、「明るく活発な私」と「物静かで落ち着いた私」というような矛盾するタイプの目標を、場合により使い分けている。	3.18 (1.18)	—	.49	—	.49
04. 私が、自分がボケ役に回るかツッコミ役に回るかは、相手しだいだ。	3.37 (1.19)	—	.64	—	.64
06. 私は、相手のノリ（反応）に合わせて話題を選ぶ。	3.53 (0.99)	—	.60	—	.60
因子間相関		.58	***	.58	***
年齢層・性別にみた下位尺度得点の α 係数		.54	.57	.65	.59

注) 各項目の得点可能範囲は1-5。標準化パス係数は全て0.1%水準で有意であった。

 $p < .001$

Table 6
新規尺度の評定平均値
と高文脈項目尺度の因子得点の単相関係数

	大学生	
	男性	女性
対象切替	.37 ***	.49 ***
自己切替	.52 ***	.60 ***

注) $|\rho| \geq .20$ で $1-\beta \geq .80$ 。

 $p < .001$

新規尺度と高文脈項目尺度の相関 (Table 6) は、
ほぼ全て、比較的強い正の相関



併存的妥当性を確認した

なお、「ほぼ全て」の例外部分
(Table 6赤枠内) は… (→次頁)

Table 7

新規尺度の対象切替評定平均値と高文脈項目の対象切替項目素点の単相関係数

		大学生	
		男性	女性
対象切替の 高文脈項目	01. 私は、恋愛相談をする友人と、進路の相談をする友人とは違うと思う。	.29 ***	.46 ***
	03. 私は、一緒に昼食をとる友人と、暇なときに遊ぶ友人とは違う。	.06	.35 ***
	05. 私は、遊ぶ友人と勉強する友人を区別している。	.22 **	.25 ***

注) $|\rho| \geq .20$ で $1-\beta \geq .80$.** $p < .010$ *** $p < .001$

「一緒に昼食をとる友人と、暇なときに遊ぶ友人」が同じか否かと対象切替得点の関連は、大学生男性では有意ではない。

友人と“一緒に昼食をとる”ことの意味ないし重みが、男女で異なる？

このように場面の限定の強い項目は、場面の意味の性差、年齢層差、…個人差に強く影響される虞があるため、幅広い層を対象とした調査研究には不向き。

以上、開発目標（多年齢層対応、内的整合性、併存的妥当性）が達成されたことをもって、新規尺度（前掲Table 3）を

「同性友人関係における状況に応じた切替尺度多年齢対応版（Situational Changeover Scale Multi-age version: SCSM）」とする。

本報告のまとめ

- 生涯発達の観点からの検討を蓄積していくために、「同性友人関係における状況に応じた切替尺度多年齢対応版（Situational Changeover Scale Multi-age version: SCSM）」を開発した。
- 幅広い年齢層に適用可能であると共に、評定平均値を使用可能な内的整合性を備えることを確認した。
- 先行知見を活用可能な併存的妥当性を確認した。

次の課題

- 収束的妥当性の検討。
 2025年度日本青年心理学会第33回大会（12/6 – 12/7, 国立オリンピック記念青少年総合センター）で報告予定, + 準備中
- 高校生以下の年齢層での検討。  準備中

引用文献, 使用した統計ツール

- 浅野 智彦 (1995). 友人関係における男性と女性 川崎 賢一・芳賀 学・小川 博司 (編) 都市青年の意識と行動——若者たちの東京・神戸90's [分析編] —— (pp.53-66) 恒星社厚生閣
- 浅野 智彦 (2014). SNSは「私」を変えるか——ケータイ・ネットと自己の多元化—— 松田 美佐・土橋 臣吾・辻 泉 (編) ケータイの2000年代——成熟するモバイル社会—— (pp.117-148) 東京大学出版会
- 江利川 滋・山田 一成 (2015). Web調査の回答形式の違いが結果に及ぼす影響——複数回答形式と個別強制選択形式の比較—— 社会心理学研究, 31(2), 112-119. https://doi.org/10.14966/jssp.31.2_112
- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A-G., & Buchner, A. (2007). G*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior research methods*, 39, 175-191. <https://doi.org/10.3758/BF03193146>
- 藤野 遼平 (2022). 現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連 青年心理学研究, 33(2), 87-104. https://doi.org/10.20688/jsyap.33.2_87
- 堀 啓造 (2005). 因子分析における因子数決定法——平行分析を中心にして—— 香川 大学経済論叢, 77(4), 35-70. <https://kagawa-u.repo.nii.ac.jp/records/6496>
- 岩田 考 (1999). 友人関係の現在——友人関係・自己意識・不安—— モノグラフ・高校生, 56, 32-51.
- 岩田 考 (2000). 高校生の自分探し——「自分探し」という神話—— モノグラフ・高校生, 60, 36-49.
- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野 智彦 (編) 検証・若者の変貌——失われた10年の後に—— (pp.151-186) 勁草書房

- 岩田 考 (2014). ケータイは友人関係を変えたのか——震災による関係の〈縮小〉と〈柔軟な関係〉の広がり—— 松田 美佐・土橋 臣吾・辻 泉 (編) ケータイの2000年代——成熟するモバイル社会—— (pp.171-200) 東京大学出版会
- 勝家 さち (2014). 現代大学生の自己意識と友人とのかかわり及びアイデンティティ形成に関する研究——青年の基本的信頼感に焦点を当てて—— 愛知教育大学リポジトリ Retrieved March 30, 2023, from <https://hdl.handle.net/10424/5511>
- Matsushima, R. (2016). The relationship between situational change and selectiveness in friendships for adjustment to the university, *International Journal of Adolescence and Youth*, 21(3), 356-36.
<https://doi.org/10.1080/02673843.2013.844179>
- 宮崎 弦太・田端 拓哉・池上 知子 (2010). 友人関係の単一：多重送信性と都市的環境への適応——都市部大学生を対象として—— 都市文化研究, 12, 77-84.
<https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-114>
- 長沼 恭子・落合 良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47. https://doi.org/10.20688/jsyap.10.0_35
- 大谷 宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替——心理的ストレス反応との関連にも注目して—— 教育心理学研究, 55(4), 480-490.
https://doi.org/10.5926/jjep1953.55.4_480
- 大谷 宗啓 (2013). 大学生の同性友人関係における状況に応じた切替——社会的スキルとしての効果性と教育上の課題—— 大阪電気通信大学人間科学研究, 15, 79-93.
<http://id.nii.ac.jp/1148/00000110/>
- 大谷 宗啓 (2019). 大学生にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような体験なのか——自由記述と半構造化面接によるボトムアップアプローチ—— 滋賀大学教育学部紀要, 68, 99-113. <https://hdl.handle.net/10441/00015756>

大谷 宗啓 (2024). 不使用型はナীব？——友人関係における状況に応じた切替の4
類型別の, 友人数, 多様性志向, LSO-U, LSO-E, 精神内的罪悪感, 対人摩耗の
比較—— 日本心理学会第88回大会発表論文集, 892.

https://doi.org/10.4992/pacjpa.88.0_3C-057-PO

大谷 宗啓・渡部 雅之・若松 養亮 (2024). 大学生・成人の心理社会的発達と同性友人
関係における対象切替・自己切替・対人ストレス経験頻度の関連——対象切
替と自己切替の交互作用に着目する必要性—— 青年心理学研究, 36(1), 5-29.

https://doi.org/10.20688/jsyap.36.1_5

小澤 昌之 (2016). 青少年の友人関係の使い分け志向と学校生活——日韓中高生を対象
とした意識調査をもとに—— 人文 (学習院大学人文科学研究所), 15, 115-131.

<https://hdl.handle.net/10959/4136>

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育,
研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研
究, 1, 59-73. <https://hdl.handle.net/11150/10815>

総務省統計局 (2022). 令和2年国勢調査就業状態等基本集計 統計局ホームページ/令
和2年国勢調査/調査の結果 Retrieved March 30, 2023, from

<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/kekka.html>

菅原 健太 (2011). 高校生における自己の使い分けと友人関係の使い分け 現代社会学
研究, 24, 43-61. <https://doi.org/10.7129/hokkaidoshakai.24.43>

辻 大介 (1999). 若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア 橋元 良明・船
津 衛 (編) 子ども・青少年とコミュニケーション——シリーズ・情報環境と社会
心理3—— (pp.11-27) 北樹出版

辻 大介 (2004). 若者の親子・友人関係とアイデンティティ——16～17歳を対象とし
たアンケート調査の結果から—— 関西大学社会学部紀要, 35(2), 147-159.

<https://hdl.handle.net/10112/00022294>